

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書神学特殊研究 b	大住 雄一
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 旧約聖書の神学、釈義的課題、歴史の諸問題のなかからひとつの課題を取り上げ、深く掘り下げる特殊研究クラスである。前期課程と合同の授業であるが、後期課程にふさわしい発表が求められる。</p>	
<p><到達目標> 教会の正典としての旧約聖書の意義を論じ、新しいテーゼを提出することができるようになる。</p>	
<p><授業の概要> 本年度は、旧約聖書の根本問題である契約について、契約の成立を保証する「契約場面」を精査し、儀式の意味や、それによって見えてくる契約の特質を吟味する。</p>	
<p><履修条件> テキストの講読に耐えるヒブル語の基礎知識および契約に関する教義的素養が必要である。</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 導入 代表的な「契約場面」 2. 創世記15：7-21 3. 創世記17：1-14 4. 創世記28：10-22 5. 創世記35：1-15 6. 出エジプト記19：3-9 7. 出エジプト記19：10-25 8. 出エジプト記24：1-2、9-11 9. 出エジプト記24：3-8 10. 出エジプト記34：1-10、28 11. 申命記7：1-15 12. 申命記7：16-26 13. 申命記26：5-19 14. 申命記30：1-14 15. まとめ 申命記31：24-30、32：43-47 	
<p><準備学習等の指示> 毎回、示された箇所のテキストを、ヒブル語で、よく読んでくること。</p>	
<p><テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensis, Biblia Hebraica Quinta</p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 毎回の発表によって、評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書文学特殊研究 a	小友 聡
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 雅歌について解釈の可能性と方法論を学術的に探究する。</p>	
<p><到達目標> 旧約聖書の中で最も難しい「雅歌」を理解する。</p>	
<p><授業の概要> 雅歌を取り上げ、雅歌解釈の方法についてあらゆる可能性を考える。後半はテキストを丹念に読む。</p>	
<p><履修条件> 大学院前期課程との合同の授業。ヒブル語基礎文法を学んだ人で、雅歌の解釈に興味がある人。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：オリエンテーション、雅歌とはどういう書か。 第2回：雅歌の歴史批評的解釈 第3回：雅歌の比喩的解釈 第4回：雅歌の哲学的解釈 第5回：雅歌解釈の可能性 第6回：雅歌の構造を検討する 第7回：雅歌1章 第8回：雅歌2章 第9回：雅歌3章 第10回：雅歌4章 第11回：雅歌5章 第12回：雅歌6章 第13回：雅歌7章 第14回：雅歌8章 第15回：まとめ</p>	
<p><準備学習等の指示> 前半は解釈の方法論について議論し、後半は雅歌テキストを1章ずつ積義する。準備して参加すること。</p>	
<p><テキスト> BHSを用いる。雅歌解釈の方法論については、並木浩一「雅歌 牧歌の伝統を革新する愛の表現」『著作集3』、オリゲネス（小高訳）『雅歌注解・講話』、永井晋「雅歌の形而上学/生命の現象学」『現代思想 レヴィナス』等。</p>	
<p><参考書> その都度、指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度と学期末に雅歌に関する提出レポート（8000字）によって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書文学特殊研究 b	小友 聡
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> R. E. クレメンツ編『古代イスラエルの世界』を精読し、批判的に対論する。</p>	
<p><到達目標> 現代イギリスの旧約学の水準を知り、思索を深める。</p>	
<p><授業の概要> 社会学、人類学、政治学の観点から論じられた旧約論文を読み、古代イスラエル世界を多面的に考察する。演習形式で行う。</p>	
<p><履修条件> 大学院前期課程との合同の授業である。旧約専攻外の学生にも開かれた授業である。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：オリエンテーション 第2回：「歴史的・文化的背景に照らしたイスラエル」(R. E. クレメンツ) 第3回：「部族社会としてのイスラエル」(J. D. マーティン) 第4回：「イスラエルの王権」(K. W. ホワイトラム) 第5回：「変容するイスラエルの概念」(H. G. M. ウィリアムソン) 第6回：「ユダヤ人ディアスポラの起源」(R. J. コギンズ) 第7回：「預言と社会」(R. P. キャロル) 第8回：「知恵文学作家の社会的環境世界」(R. N. ワイブレイ) 第9回：「黙示文書の社会的環境世界」(P. W. デイヴィス) 第10回：「聖なるものと祭儀」(P. J. バッド) 第11回：「聖戦の概念」(G. H. ジョーンズ) 第12回：「古代イスラエルにおける契約概念」(R. デヴィッドソン) 第13回：「土地」(E. W. デイヴィス) 第14回：「古代イスラエルにおける女性」(G. E. エマーソン) 第15回：「旧約聖書における生と死」(M. A. ニブ)</p>	
<p><準備学習等の指示> 毎回担当者に論文の内容報告をしていただき、それに基づいて討議する。積極的な発言を求める。</p>	
<p><テキスト> R. E. クレメンツ編(木田/月本監訳)『古代イスラエルの世界 社会学・人類学・政治学からの展望』、リトン、2002年(定価10,000円)。高価な翻訳書なので、用意できない人には図書館でコピーしていただく。</p>	
<p><参考書> その都度指示する。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 発表と授業への積極性、また学期末の提出レポート(約8000字)によって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典特殊研究 a	本間 敏雄
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ></p> <p>旧約聖書原典である写本とマソラ本文、特にマソラの専門的知識を修得し、洪水・ノア物語においてユダヤ教正典（Miqra）としての本文と諸現象の理解を深め、マソラ・テキストの神学を探る。その関連で<ソーフェリームの修正>伝承について調査する。</p>	
<p><到達目標></p> <p>レニングラード写本（L）を読み、写本本文の特質を把握できる。マソラの専門用語を理解し、その積義的意味を洞察できる。マソラ学者の仕事と本文の諸現象を認識し、背後にあるユダヤ教神学について考察できる。<ソーフェリームの修正>伝承個所の調査により、全体像と内容を把握できる。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>創世記8、9章の洪水、ノア物語を代表的ベン・アシェル写本であるレニングラード写本（L）で読み、ヒブル語本文の諸現象と、ユダヤ教聖書学の結晶であるマソラ読解方法、その積義的意義を学び、テキスト理解を深める。その一環として、近現代の印刷聖書の脚注に見られ、諸翻訳に大きな影響を及ぼしてきた<ソーフェリームの修正>伝承とその<オリジナル本文>伝承を扱う。前期は、その全体像と内容、諸翻訳との関係、積義的意義について考察する。後期課程「旧約聖書原典積義Ⅱa」と合同。</p>	
<p><履修条件></p> <p>ヒブル語文法修得者</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 創世記8：1－5 洪水の停止 第2回 8：6－9 鳥と鳩 第3回 8：10－14 地の面、乾く 第4回 8：15－20 箱舟から出る 第5回 8：21－22 ヤハウエの決意 第6回 五書研究史（資料説）と洪水物語 第7回 9：1－3 祝福 第8回 9：4－7 流血の賠償 第9回 9：8－11 ノア契約 第10回 9：12－17 契約のしるし 第11回 9：18－23 ノアと息子たち 第12回 9：24－28 呪いと祝福 第13回 洪水・ノア物語総括：ノア契約の神学 第14回 <ソーフェリームの修正>伝承（1）当該語/テキストと BHS 脚注情報・表記法 第15回 " （2）伝承内容と分析、諸翻訳</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト></p> <p>レニングラード写本（Codex Leningradensis）写真版。Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS):Genesis、Biblia Hebraica Quinta(BHQ):Genesis、S.Frensdorff,ed.Das Buch Ochlah W'Ochlah(Massora),1864. Massorah Gedolah - iuxta Codicem Leningradensem(ed. G.E.Weil).「ヒブル語入門」（改訂増補版 左近／本間）12. 補説：本文の諸現象（補注一覧）。<ソーフェリームの修正>伝承については上記 BHS（一卷本）等の他「翻訳と本文」（17）－（22）（『形成』293－299号所収（1995））。</p>	
<p><参考書></p> <p>Leitfaden zur Biblia Hebraica(R.Wonneberger), A simplified guide to BHS(H.P.Rueger),「旧約聖書の本文研究」（E.ヴェルトヴァイン 鍋谷／本間共訳）、諸資料、文献は順次提示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>討議及び、写本とマソラ本文の課題に関するレポートによって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
聖書語学特殊研究 a	佐藤 泉
前期・2単位	<登録条件> 通年で履修するのが望ましい。
<授業のテーマ> 聖書の古代訳の一つにペシッタ（シリア語訳）がある。ペシッタを読むためのシリア語文法の基礎を学ぶ。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行なう。	
<到達目標> ①シリア語文法の基礎を身につける。②身につけたシリア語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、ペシッタを読むことができるようになる。③聖書の原典とペシッタや他の古代訳との比較を行なうことができるようになる。	
<授業の概要> 練習問題に取り組むながら、ペシッタを読むために必要なシリア語文法を学ぶ。聖書の原典と古代訳との比較に慣れていく。	
<履修条件> ヒブル語履修済みであること。	
<p><授業計画></p> <p>第1回：序 シリア語を学ぶ意義等を話し、子音について （1）ヤコブ派の書体を学ぶ。</p> <p>第2回：子音について（2） ネストリウス派とエストラングラの書体を学ぶ。</p> <p>第3回：母音について ヤコブ派とネストリウス派の母音記号を学ぶ。</p> <p>第4回：代名詞について 人称・指示・疑問・関係代名詞を学ぶ。</p> <p>第5回：前置詞について 基本的なものをいくつか学ぶ。</p> <p>第6回：名詞について（1） 基本的な名詞について、ヘブライ語との比較をしつつ、その特徴を学ぶ。</p> <p>第7回：代名詞語尾について ヘブライ語と同様にシリア語も名詞等に代名詞語尾がつくことを学ぶ。</p> <p>第8回：名詞について（2） 母音の移動を伴うものを学ぶ。</p> <p>第9回：名詞について（3） 不規則変化するものを学ぶ。</p> <p>第10回：規則動詞について（1） Peal 形の変化、特に完了を学ぶ。</p> <p>第11回：規則動詞について（2） Peal 形の変化、特に未完了・命令・分詞・不定詞を学ぶ。</p> <p>第12回：規則動詞について（3） Ethpeel 形の変化を学ぶ。</p> <p>第13回：規則動詞について（4） Pael 形と Ethpael 形の変化を学ぶ。</p> <p>第14回：規則動詞について（5） Aphel 形と Ettaphal 形の変化を学ぶ。</p> <p>第15回：規則動詞について（6） 代名詞語尾のついた形の変化を学ぶ。</p>	
<準備学習等の指示> 授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。	
<テキスト> Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949.	
<参考書> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926. Takamitsu Muraoka, Classical Syriac for Hebraists, Wiesbaden : O. Harrassowitz, 1987. Theodor Nöldeke, Compendious Syriac Grammar, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2001.	
<学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況、ペシッタのテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
聖書語学特殊研究 b	佐藤 泉
後期・2単位	<登録条件> 通年で履修するのが望ましい。
<授業のテーマ> 聖書の古代訳の一つにペシッタ（シリア語訳）がある。ペシッタを読むためのシリア語文法の基礎を学ぶ。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行なう。	
<到達目標> ①シリア語文法の基礎を身につける。②身につけたシリア語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、ペシッタを読むことができるようになる。③聖書の原典とペシッタや他の古代訳との比較を行なうことができるようになる。	
<授業の概要> シリア語文法の学びを継続する。その後に講読に入るが、まず新約からマタイによる福音書の「山上の説教」、さらに旧約からエレミヤ書等をペシッタで読み、さらに聖書の原典や他の古代訳との比較を行なう。（箇所は未定。授業中に指示する。）	
<履修条件> ヒブル語履修済みであること並びに聖書語学特殊研究 a（シリア語）履修済みであること。	
<p><授業計画></p> <p>第1回：不規則動詞について（1） Pê Nûn 動詞の変化を学ぶ。</p> <p>第2回：不規則動詞について（2） Lâmed 喉音動詞の変化を学ぶ。</p> <p>第3回：不規則動詞について（3） Pê 'alep 動詞の変化を学ぶ。</p> <p>第4回：不規則動詞について（4） Pê Yôd 動詞の変化を学ぶ。</p> <p>第5回：不規則動詞について（5） 二根字動詞の変化を学ぶ。</p> <p>第6回：不規則動詞について（6） 二重'ayin 動詞の変化を学ぶ。</p> <p>第7回：不規則動詞について（7） Lâmed Hê・Lâmed Yôd 動詞の変化を学ぶ。</p> <p>第8回：「山上の説教」の講読（1） Jennings の辞書を引きながら、ペシッタを読むことに慣れる。</p> <p>第9回：「山上の説教」の講読（2） 原典との比較をしつつ読むことを味わう。</p> <p>第10回：「山上の説教」の講読（3） シリア語文法、特に不規則変化する名詞を確認しつつ読む。</p> <p>第11回：「山上の説教」の講読（4） シリア語文法、特に動詞の変化を確認しつつ読む。</p> <p>第12回：「山上の説教」の講読（5） シリア語が解釈に影響を与えている一例について話す。</p> <p>第13回：エレミヤ書等の講読（1） ネストリウス派の書体・母音記号で読むことに慣れる。</p> <p>第14回：エレミヤ書等の講読（2） シリア語文法を全体的に思い出しつつ読む。</p> <p>第15回：エレミヤ書等の講読（3） 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。</p>	
<準備学習等の指示> 授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。	
<テキスト> Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949.	
<p><参考書></p> <p>William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926.</p> <p>Takamitsu Muraoka, Classical Syriac for Hebraists, Wiesbaden: O. Harrassowitz, 1987.</p> <p>Theodor Nöldeke, Compendious Syriac Grammar, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2001.</p> <p>J. Payne Smith, A compendious Syriac dictionary: founded upon the Thesaurus Syriacus of R. Payne Smith, Winona Lake, Ind.: Eisenbrauns, 1998.</p>	
<学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況、ペシッタのテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典特殊研究 a	遠藤 勝信
前期・2単位	<登録条件> 原則として通年(a, b)で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。
<p><授業のテーマ> ヨハネの福音書11～13章の原典釈義。</p>	
<p><到達目標> 研究史、釈義の方法論、及びテキストと真摯に向き合う姿勢を学ぶ。テキストの文学性、及び歴史との関連性を意識しつつ丁寧に釈義し、神学的考察へと向かえるようにする。</p>	
<p><授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向(研究史、方法論)を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。</p>	
<p><履修条件> 新約ギリシャ語原典テキスト読解力を有すること。ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい。</p>	
<p><授業計画></p> <p>I. 講義を中心に</p> <p>第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と釈義の諸問題を学ぶ。 第02回 ギリシャ語新約聖書本文批評の実際。 第03回 テキストの文学批評の実際。 第04回 テキストと歴史批評の実際。</p> <p>II. 演習(参加者による釈義の発表とディスカッション)を中心に</p> <p>第05回 ヨハネ11:47～57(イエス殺害計画)の原典釈義 第06回 ヨハネ12:01～11(香油注ぎ)の原典釈義 第07回 ヨハネ12:12～19(エルサレム入城)の原典釈義 第08回 ヨハネ12:20～26(ギリシア人來訪)の原典釈義 第09回 ヨハネ12:27～36(イエスの祈り)の原典釈義 第10回 ヨハネ12:37～43(拒絶)の原典釈義 第11回 ヨハネ12:44～50(さばき)の原典釈義 第12回 ヨハネ13:01～11(洗足)の原典釈義 第13回 ヨハネ13:12～20(洗足の意義)の原典釈義 第14回 ヨハネ13:21～30(ユダの裏切り予告)の原典釈義</p> <p>III. 総括</p> <p>第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。</p>	
<p><準備学習等の指示> クラスで取り上げる箇所のギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。</p>	
<p><テキスト> Nestle-Aland (28th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i></p>	
<p><参考書> R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年 R・A・カルベッパ著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年 R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年 C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol.1</i>, 2003. M. Endo, <i>Creation and Christology - A Study on the Johannine Prologue</i> (WUNT), 2002. 他、クラスで随時紹介。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と期末試験(指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000～10,000文字])。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典特殊研究 b	遠藤 勝信
後期・2単位	<登録条件> 原則として通年(a, b)で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。
<授業のテーマ> ヨハネの黙示録18～21章の原典積義。	
<到達目標> 研究史、積義の方法論、及びテキストと真摯に向き合う姿勢を学ぶ。テキストの文学性、及び歴史との関連性を意識しつつ丁寧に積義し、神学的考察へと向かえるようにする。	
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ黙示録研究の動向(研究史、方法論)を概観し、積義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。積義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。	
<履修条件> 新約ギリシャ語原典テキスト読解力(ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい)を有すること。	
<授業計画>	
I. 講義を中心に 第01回 インTRODakション。黙示録の文学ジャンル。 第02回 黙示録を読む前に(その1): 黙示録の周辺、背景理解。 第03回 黙示録を読む前に(その2): 構造と構成、神学、他。 第04回 黙示録1～16章7節までを概観し、積義の営みにおける課題と観点を確認する。	
II. 演習(参加者による発表とディスカッション)を中心に 第05回 黙示録18:21～24 (バビロンへのさばき)の原典積義 第06回 黙示録19:01～04 (大群衆の賛美)の原典積義 第07回 黙示録19:05～10 (小羊の婚宴)の原典積義 第08回 黙示録19:11～16 (白馬の騎手)の原典積義 第09回 黙示録19:17～21 (白馬の騎手と軍勢の勝利)の原典積義 第10回 黙示録20:01～06 (千年王国)の原典積義 第11回 黙示録20:07～10 (サタンの敗北)の原典積義 第12回 黙示録20:11～15 (最後のさばき)の原典積義 第13回 黙示録21:01～08 (新天新地)の原典積義 第14回 黙示録21:09～14 (新しいエルサレム)の原典積義	
III. 総括 第15回 積義演習の総括的な反省と展望。	
<準備学習等の指示> クラスで取り上げる箇所のギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。	
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i>	
<参考書> 佐竹明著『ヨハネの黙示録』(上・中巻)2009年 R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年 R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i> , 1993. G. Beale, <i>The Book of Revelation</i> (NIGTC), 1999. D. Aune, <i>Revelation 6-16</i> (WBC), 1997. S. Smalley, <i>The Revelation of John</i> (IVP), 2005. 他、クラスで随時紹介。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と期末試験(指定されたテキストについての積義ペーパー [8,000～10,000文字])。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
聖書解釈学特殊研究 a	中野 実
前期・2単位	<登録条件> 特になし
<授業のテーマ> ヘブライ書の釈義的研究を通して、新約聖書神学に関する深い知識を得る	
<到達目標> 具体的な聖書テキストを、しかもギリシャ語原典で釈義する力を得ることができる。それによって聖書をより深く主体的に解釈する力を身に付けることができる。	
<授業の概要> 今年度は、ヘブライ書の「釈義」という課題を一緒に学ぶ。序論的な事柄を学んだのち、各単元（ペリコペー）を分担しつつ、釈義していく。	
<履修条件> 通年で履修する事が好ましい。そうでない場合は、事前に担当者に相談すること。クラスにおける議論をリードできるよう、準備をしっかりとすることが求められている。	
<p><授業計画></p> <p>①オリエンテーション</p> <p>②緒論Ⅰ いつ、どこで、誰によって執筆されたか？</p> <p>③緒論Ⅱ 誰に対して何のために書かれたか？ ローマ教会の背景？</p> <p>④緒論Ⅲ ヘブライ書の構成について</p> <p>⑤1章1-4節 学生による発表 本文批評上の問題、試訳、文法的説明、キーワード、キー概念の分析</p> <p>⑥1章1-4節 原典釈義 文脈、構成、背景</p> <p>⑦1章1-4節 原典釈義 節ごとの注解、解説</p> <p>⑧1章5-14節 学生による発表</p> <p>⑨1章5-14節 原典釈義 文脈、構成、背景</p> <p>⑩1章5-14節 原典釈義 節ごとの注解、解説</p> <p>⑪2章1-4節 学生による発表</p> <p>⑫2章1-4節 原典釈義 文脈、構成、背景</p> <p>⑬2章1-4節 原典釈義 節ごとの注解、解説</p> <p>⑭2章5-18節 学生による発表</p> <p>⑮2章5-18節 原典釈義 文脈、構成、背景</p>	
<準備学習等の指示> しっかりとギリシャ語原典を読むこと、さらに必要な注解書（とくに外国語文献）とも取り組むことを通して、積極的にリサーチをしてクラスに臨むこと。	
<テキスト> ギリシャ語新約聖書	
<参考書> クラスで指示する外国語の注解書。	
<学生に対する評価（方法・基準）> クラスへの積極的参加（出席、発表、質問、議論におけるリーダーシップなど）を求める。参加、分担発表（40%）、および（6000字以上の）期末レポート（60%）によって総合的に評価する。出席が三分の二に達しない場合は、原則として評価の対象にしない。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
聖書解釈学特殊研究 b	中野 実
後期・2単位	<登録条件> 特になし
<授業のテーマ>ヘブライ書の釈義的研究	
<到達目標>具体的な聖書テキストを、しかもギリシャ語原典で深く釈義する力を獲得すること、それによって聖書を深く主体的に解釈できるようになる。	
<授業の概要>今年度はヘブライ書の「釈義」という課題を、一緒に分担しながら学ぶ。	
<履修条件>通年で履修する事が好ましい。そうでない場合は、事前に担当者と相談する事。クラスにおいて議論をリードする事が求められる。	
<p><授業計画></p> <ul style="list-style-type: none"> ①2章 5-18節 原典釈義 節ごとの注解、解説 ②3章 1-6節 学生による発表 ③3章 1-6節 原典釈義 文脈、構成、背景 ④3章 1-6節 原典釈義 節ごとの注解、解説 ⑤3章 7-19節 学生による発表 ⑥3章 7-19節 原典釈義 文脈、構成、背景 ⑦3章 7-19節 原典釈義 節ごとの注解、解説 ⑧4章 1-11節 学生による発表 ⑨4章 1-11節 原典釈義 文脈、構成、背景 ⑩4章 1-11節 原典釈義 節ごとの注解、解説 ⑪4章 12-13節 学生による発表 ⑫4章 12-13節 原典釈義 節ごとの注解、解説 ⑬4章 14-16節 学生による発表 ⑭4章 14-16節 原典釈義 文脈、構成、背景 ⑮4章 14-16節 原典釈義 節ごとの注解、解説 	
<準備学習等の指示>しっかり正確にギリシャ語原典を読む努力をし、必要な注解書（とくに外国語文献）と取り組むことが求められる	
<テキスト>ギリシャ語新約聖書	
<参考書>必要に応じてクラスで指示する外国語の注解書	
<学生に対する評価（方法・基準）>参加度（とくに議論におけるリーダーシップ）、分担発表（40%）と（6000字以上の）期末レポート（60%）によって総合的に評価する。ただし、出席が三分の二に達しない場合は、原則として評価の対象にしない。	

聖書神学専攻	
博士論文指導演習聖書神学 a	各指導教授
前期・0単位	<登録条件> 博士論文指導演習聖書神学 b と通年で登録すること。
<授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。	
<到達目標> 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。	
<授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。	
<履修条件> 2011 年度以降博士課程後期課程に入学した聖書神学専攻者。	
<授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。	
<準備学習等の指示>	
<テキスト>	
<参考書>	
<学生に対する評価（方法・基準）>	

聖書神学専攻	
博士論文指導演習聖書神学 b	各指導教授
後期・0単位	<登録条件> 博士論文指導演習聖書神学 a と通年で登録すること。
<授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。	
<到達目標> 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。	
<授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。	
<履修条件> 2011 年度以降博士課程後期課程に入学した聖書神学専攻者。	
<授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。	
<準備学習等の指示>	
<テキスト>	
<参考書>	
<学生に対する評価（方法・基準）>	

組織神学専攻・組織神学関係	
教義学特殊研究 a	近藤 勝彦
前期・2単位	<登録条件> 学期ごとの登録可
<授業のテーマ> キリスト教教義学の問題として「罪と死と苦難の問題」を取り上げる。	
<到達目標> 法や心理や医の問題など経験科学の扱いと異なる神学的な罪・死・苦難の問題の理解を身に着ける	
<授業の概要> 教義学における扱いの配置として、創造論と贖罪論の「間」の問題とし、罪を論じ、それと死の関連を扱う。その上で救済史における苦難の問題をめぐって「神義論」の可否、そのあり方の議論に及ぶ	
<履修条件> 組織神学の専攻者、もしくは他部門専攻の場合、各自の専攻分野における「罪・死・苦難」の問題の扱いを理解する用意のある者	
<授業計画> 第1回 罪と死と苦難をめぐる現在の状況 第2回 罪の経験的認識と啓示的認識 第3回 罪の神学史概観 第4回 A. リッチュルの「罪の国」とK. バルトの罪論の問題 第5回 罪の本質と領域 第6回 原罪：罪の根源性、全体性、普遍性、不可避性 第7回 高慢、強欲、虚偽 第8回 罪の結果としての死 第9回 全体的な死と死の時 第10回 罰と審判 第11回 神義論と教義学 第12回 ライプニッツ、ヘーゲル、M. ヴェーバー 第13回 現代の神義論 第14回 キリストの十字架による神義論への解答 第15回 総括	
<準備学習等の指示> 教義学の著作を選んで、罪・死・苦難がどう扱われているか目を通すこと	
<テキスト> 講義テキストを配布する	
<参考書> 熊野義孝『教義学』、佐藤敏夫『キリスト教神学概論』、バルト『教会教義学・和解論』、ブルンナー『教義学Ⅱ』、Berkhof, Christian Faith, Michigan 1979 など	
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業内容と参考文献を資料にして、6000字前後の小論文を求め、その内容に示された理解度や探究姿勢によって評価する。	

組織神学専攻・組織神学関係	
教義学特殊研究 b	近藤 勝彦
後期・2単位	<登録条件> 学期ごとの登録可
<授業のテーマ> 贖罪論とキリスト論を扱う	
<到達目標> キリスト教信仰の核心についての神学的な諸事項を理解し、現代の思惟として教義学的に考えることを身に着ける	
<授業の概要> 贖罪論とキリスト論の関係、両者をめぐる神学史的遺産を踏まえて、今日の教義学の可能性を示す	
<履修条件> 組織神学の専攻者、もしくは他部門専攻の場合、各自の専攻分野における「贖罪論とキリスト（メシア）論」の問題の扱いを理解する用意のある者	
<授業計画> 第1回 贖罪論とキリスト論の関係、贖罪論の教義学における位置について 第2回 贖罪論の教理史的カテゴリー 第3回 贖罪論史の概観（1）古代と中世 第4回 贖罪論史の概観（2）宗教改革者の贖罪論 第5回 贖罪論史の概観（3）フォーサイスとバルト 第6回 贖罪理解の聖書的表象（1） 第7回 贖罪理解の聖書的表象（2） 第8回 三位一体論的贖罪論 第9回 受肉論（御子の人間化）の意味 第10回 聖霊論的キリスト論と処女降誕 第11回 両性論とその困難 第12回 アンヒュポスタシスとエンヒュポスタシスをめぐって 第13回 謙卑と高举 第14回 キリストの時と職能 第15回 総括	
<準備学習等の指示> 教義学の著作を選んで、「贖罪論とキリスト論」がどう扱われているか目を通すこと	
<テキスト> 講義テキストを配布する	
<参考書> 近藤勝彦『贖罪論とその周辺』、熊野義孝『教義学』、佐藤敏夫『キリスト教神学概論』、バルト『教会教義学・和解論』、ブルンナー『教義学Ⅱ』、Berkhof, Christian Faith, Michigan 1979 など	
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業内容と参考文献を資料にして、6000字前後の小論文を求め、その内容に示された理解度や探究姿勢によって評価する。	

組織神学専攻・組織神学関係	
キリスト教倫理学特殊研究 a キリスト教社会倫理特殊研究 a	神代 真砂実
前期・2単位	<登録条件> キリスト教倫理学特殊研究 b (キリスト教社会倫理特殊研究 b) との通年の履修が望ましい。
<授業のテーマ> 組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』中の倫理学についての部分を学ぶことで、バルトの倫理思想について深い理解を得、自分なりの評価を下せるようにする。	
<到達目標> ①バルトの神学的思惟の特徴を理解する。②バルトを通して、倫理学の特定の主題についての総合的な理解を身に着ける。③当該主題についてのバルト神学の貢献と問題点を理解し、自分なりの評価をレポートのかたちで説得力をもって表明できるようにする。	
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から創造論中の倫理学、特に 54 節 (「交わりの中での自由」) に展開される性・結婚・家庭・民族等にかかわる議論を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。	
<履修条件> 前期課程との合同 (並行) 授業のため、後期課程の履修者は前期課程の学生よりも常に少なくとも一歩から二歩先んじた準備が期待されている。また、議論をリードする役割も求められる。	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. テキスト、3～16 頁 (1. 男と女①) 3. 同、16～29 頁 (同②) 4. 同、30～48 頁 (同③) 5. 同、48～65 頁 (同④) 6. 同、65～80 頁 (同⑤) 7. 同、80～91 頁 (同⑥) 8. 同、91～102 頁 (同⑦) 9. 同、102～116 頁 (同⑧) 10. 同、116～127 頁 (同⑨) 11. 同、127～143 頁 (同⑩) 12. 同、143～162 頁 (同⑪) 13. 同、162～170 頁 (同⑫) 14. 同、170～189 頁 (同⑬) 15. 同、189～210 頁 (同⑭) 	
<準備学習等の指示> 演習なので、必ずテキストをよく読んでから出席することはもちろんであるが、さらに、テキストの内容に関連する事柄について自分から積極的にリサーチし、考察し、問題点を整理しておくこと。	
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・創造論IV／2 創造者なる神の戒め〈ii〉』、吉永正義訳 (新教出版社、オンデマンド)。	
<参考書> 授業の中で適宜、紹介するが、Geoffrey W. Bromiley, <i>An Introduction to the Theology of Karl Barth</i> 中の当該箇所についての記述には必ず目を通しておくこと。	
<学生に対する評価 (方法・基準)> 授業への参加度 (議論におけるリーダーシップを含む)、小課題、および期末のレポート (本文 6,000 字以上) による。	

組織神学専攻・組織神学関係	
キリスト教倫理学特殊研究 b キリスト教社会倫理特殊研究 b	神代 真砂実
後期・2単位	<登録条件> キリスト教倫理学特殊研究 a (キリスト教社会倫理特殊研究 a) との通年の履修が望ましい。
<授業のテーマ> 前期と同じ。	
<到達目標> 前期と同じ。	
<授業の概要> 前期と同じ。	
<履修条件> 前期と同じ。	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーションおよびテキスト、210～220 頁 (1. 男と女⑮) 2. テキスト、220～227 頁 (同⑯) 3. 同、228～240 頁 (同⑰) 4. 同、241～260 頁 (2. 親と子①) 5. 同、260～275 頁 (同②) 6. 同、275～288 頁 (同③) 7. 同、288～307 頁 (同④) 8. 同、307～325 頁 (同⑤) 9. 同、326～338 頁 (3. 近い者と遠い者①) 10. 同、338～351 頁 (同②) 11. 同、351～366 頁 (同③) 12. 同、366～378 頁 (同④) 13. 同、378～389 頁 (同⑤) 14. 同、389～401 頁 (同⑥) 15. 一年の学びのまとめ 	
<準備学習等の指示> 前期と同じ。	
<テキスト> 前期と同じ。	
<参考書> 前期と同じ。	
<学生に対する評価 (方法・基準)> 前期と同じ。	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学特殊研究 a 現代哲学特殊研究 a	須田 拓
前期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可
<p><授業のテーマ> 贖罪論の諸相を学ぶことを通して、教会が宣べ伝えてきた福音の中心について深い教義学的理解を持つことを目指す。</p>	
<p><到達目標> 贖罪という信仰の重要なテーマについて、歴史的にどのような議論があるのかを知り、その特色と問題点を理解した上で、自らこの問題について深く考えることができるようになる。</p>	
<p><授業の概要> 贖罪論について、講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理した上で、特に宗教改革期やピューリタンたちの議論を概観し、現代の神学者たちの議論を踏まえつつ、あるべき贖罪論の姿を模索する。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 贖罪論の論点(1) 福音の中心としての贖罪 第3回 贖罪論の論点(2) 贖罪論の類型とその問題 第4回 古代における贖罪論 アウグスティヌスの場合を中心に 第5回 宗教改革期の贖罪論(1) ルターとルター派の場合 第6回 宗教改革期の贖罪論(2) カルヴァンと改革派の場合 第7回 履修者による発表 第8回 ピューリタンの贖罪論(1) 国教会主義者たちの贖罪論 第9回 ピューリタンの贖罪論(2) 会衆派(ジョン・オーウェン, トマス・グッドウィン)の場合 第10回 ピューリタンの贖罪論(3) 長老派(リチャード・バクスター)の場合 第11回 ピューリタンの贖罪論(4) アルミニウス主義者と急進諸派 第12回 現代の贖罪論(1) ロバート・デールとピーター・フォーサイスの場合 第13回 現代の贖罪論(2) ジェームス・デニーの場合 第14回 現代の贖罪論(3) カール・バルトとヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第15回 履修者による発表とまとめ</p>	
<p><準備学習等の指示> 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく</p>	
<p><テキスト> 特になし</p>	
<p><参考書> 授業の中で指示する</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と意見表明、期末のレポート(6,000字程度)で評価する</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学特殊研究 b 現代哲学特殊研究 b	須田 拓
後期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可
<p><授業のテーマ> 三位一体論の諸相を学ぶことを通して、現代神学の議論に触れ、深い教義学の理解を持つことを目指す。</p>	
<p><到達目標> 三位一体論の重要なテーマについて、現代神学にどのような議論があるのかを知り、その特色と問題点を理解した上で、自らこの問題について深く考えることができるようになる。</p>	
<p><授業の概要> 三位一体論について、講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべき三位一体論の姿を模索する。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 三位一体論の論点(1) 位格理解について</p> <p>第3回 三位一体論の論点(2) 御業の理解について</p> <p>第4回 位格とは何か(1) カール・バルトの場合</p> <p>第5回 位格とは何か(2) ヴォルフハルト・パネンベルクとユルゲン・モルトマンの場合</p> <p>第6回 位格とは何か(3) ジョン・ジジウラスの主張とその誤り</p> <p>第7回 履修者による発表</p> <p>第8回 御業について(1) カール・バルトの場合</p> <p>第9回 御業について(2) ヴォルフハルト・パネンベルクとユルゲン・モルトマンの場合</p> <p>第10回 御業について(3) ロバート・ジェンソンとコリン・ガントンの場合</p> <p>第11回 御業について(4) 現代の様々な神学者の理解</p> <p>第12回 三位一体論的神学をめぐって(1) 近年の批判</p> <p>第13回 三位一体論的神学をめぐって(2) 批判への反論とピューリタンの神学</p> <p>第14回 三位一体論の他分野への影響</p> <p>第15回 履修者による発表とまとめ</p>	
<p><準備学習等の指示> 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく</p>	
<p><テキスト> 特になし</p>	
<p><参考書> 授業の中で指示する</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と意見表明、期末のレポート(6,000字程度)によって評価する</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
神学史特殊研究 a	棚村 重行
前期・2単位	<登録条件> 通年で履修することが望ましい。
<授業のテーマ> 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」。	
<到達目標> 履修者が、英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17世紀～20世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学にかんする第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深めることを目指す。以上の目標を、後期課程の受講者の博士論文のテーマと関連づけて理解し、展開してゆく応用力の発揮を、レポートで立証する。	
<授業の概要> 前期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の視点を提起し、17～19世紀前半（1650-1860）までの英米のピューリタニズム移植、第一次、第二次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について、講義と史料分析を行う。	
<履修条件> 現代・近代プロテスタント神学思想の基本的な知識、あるいは英米教会史・神学思想史などへのある程度に関心と素養が必要である。前期課程との並行事業でもあるので、後期課程の履修者は、十分発表前の準備をし、参加者の議論を補足したり、リードする予習準備をすることが望ましい。	
<p><授業計画></p> <p>第1回：コース紹介。導入講義：日本の「福音主義」「福音主義の歴史」研究の批評（佐藤敏、古屋、青木他）</p> <p>第2回：講義（一）：アメリカ教会史と神学思想史論の吟味：F. ボンヘッフアー、W. G. マックラクリン他。</p> <p>第3回：史料分析（一）：17～18世紀「ピューリタン大覚醒」（T. フッカー）と英国メソジズム（ウェスレー）</p> <p>第4回：講義（二）：18世紀北米における「第一次大覚醒運動」（1730～1760）植民地時代の三大教派の出現</p> <p>第5回：史料分析（二）：J. エドワーズ（1）：「[ニューイングランド信仰復興の忠実な報告]</p> <p>第6回：史料分析（三）：J. エドワーズ（2）：「信仰復興についての幾つかの考察」</p> <p>第7回：講義（三）：18世紀北米のメソジズム神学、信仰復興、教会形成：「宗教箇条」、A. クラーク</p> <p>第8回：講義（四）：19世紀前半の「第二次大覚醒運動」（1800～1830）開拓時代の三大教派成長</p> <p>第9回：史料分析（四）：19世紀前半の新派カルヴァン主義神学の誕生：N. W. テイラー、L. ビーチャー</p> <p>第10回：史料分析（五）：C. G. フィニー（1）：回心についての説教、「組織神学」から</p> <p>第11回：史料分析（六）：C. G. フィニー（2）：「宗教の復興とは何か？」</p> <p>第12回：史料分析（七）：長老派内の新派カルヴァン主義：A. バーンズ 「救いの道」</p> <p>第13回：史料分析（五）：メソジストの神学、信仰復興、教会形成：P. カートライト、D. D. ウィードン</p> <p>第14回：講義（五）：幕末開国期日本：改革派-長老派-会衆派型およびメソジスト型「二つの福音」問題</p> <p>第15回：講義（六）：若き植村正久、本多庸一：福音主義神学、信仰復興、教会形成。FD実施。</p>	
<準備学習等の指示> テキストの予習と復習が大切である。そのために、とくに予習に力を入れ、授業中の議論を準備すること。	
<テキスト> ①W. G. Mcloughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i> , Harper and Low, 1968(コピー本で配布)。②D. A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005。(部分的にコピー資料として配布)。	
<参考書> 授業中に追って紹介する。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 前期で扱ったテーマの一つを取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成し、提出する。分量は400字詰め原稿用紙に換算して25-30枚以内。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
神学史特殊研究 b	棚村 重行
後期・2単位	<登録条件> 通年で履修することが望ましい。
<授業のテーマ> 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」	
<到達目標> 英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17世紀～20世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学の第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深める以上の目標を、後期課程の受講者の博士論文のテーマと関連づけて理解し、展開してゆく応用力の発揮を、レポートで立証する。	
<授業の概要> 後期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を確立し、19世紀後半～20世紀後半(1865-2010)までの米日の第三次、第四次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について講義と史料分析を行う。	
<履修条件> 前期に同じ。	
<p><授業計画></p> <p>第1回：コースの紹介。講義(一)「マックラクリンの北米大覚醒運動史」のおさらい</p> <p>第2回：講義(二)：19世紀後半の北米神学の諸相：南北戦争以後の北米の社会と宗教の変貌(T.L. スミス)</p> <p>第3回：史料分析(一)：19世紀後半の「第三次大覚醒運動」(1870～1920)「都市の信仰復興」について</p> <p>第4回：史料分析(二)：D. L. ムーディー(1)：ムーディーの諸説教にみる福音主義神学と教会</p> <p>第5回：史料分析(三)：D.L. ムーディー(2)：彼の信仰復興論「教会に行かぬ人に福音をどう届けるか？」</p> <p>第6回：講義(三)：20世紀初頭の日本の「大挙伝道」および「神の国」運動：本多庸一、植村正久、賀川豊彦</p> <p>第7回：史料分析(四)：20世紀前半の第一次世界大戦後の北米の「近代主義」対「根本主義」論争</p> <p>第8回：講義(四)：A. J. シンプソン：『四重の福音』；A. J. ゴードン『み霊の務め』</p> <p>第9回：史料分析(五)：日本における神学の変貌：中田重治のホーリネス神学と逢坂元吉郎の高教会神学</p> <p>第10回：講義(五)：20世紀後半の「第四次大覚醒〔戦後信仰復興〕運動」(1950～1990?)</p> <p>第11回：史料分析(六)：ビリー・グラハム(1)：略歴と神学諸テーマ(啓示、創造と墮罪、贖罪)</p> <p>第12回：史料分析(七)：ビリー・グラハム(2)：諸テーマ(救済、教会、説教と聖礼典、終末論)</p> <p>第13回：講義(六)：第二次世界大戦後日本における「戦後信仰復興運動」の神学、信仰復興、教会形成。</p> <p>第14回：講義(七)：1980年代後の英米日の福音主義諸派の動向：北米の「宗教的右派」、「福音派」の動向。</p> <p>第15回：総合討論：通年の学びからみた「福音主義」とその歴史の総括。FD実施。</p>	
<準備学習等の指示> 前期に同じ。	
<テキスト> ①W. G. Mcloughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i> , Harper and Low, 1968(コピー本で配布)。②D. A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005。(部分的にコピー資料として配布)。	
<参考書> 授業の中で、教員が追って指示する。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 後期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成せよ。分量は400字詰め原稿用紙に換算して25-30枚以内。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教父学特殊研究 a	関川 泰寛
前期・2単位	<登録条件> 特になし
<p><授業のテーマ> ニカイアからカルケドンまで（前半）の時代と教父神学を概観する。</p>	
<p><到達目標> ニカイアからカルケドンに至る古代教父の緒論とともに、キリスト論、救済論、聖霊論などの形成と展開を歴史的に跡付けて内容を修得する。テキストに沿って、該当箇所を適宜発表してもらう。</p>	
<p><授業の概要> テキストに沿いながら、主題について講義をする。同時に、指定した一次史料を読解する。</p>	
<p><履修条件> 特になし。</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 教会史の誕生：エウセビオスの時代と著作、神学 2 エウセビオスの政治神学 3 エウセビオスの教会史を読む 4 アタナシオスとニカイア神学の形成：アレイオス論争の経緯とアレイオス神学の特質 5 アタナシオスの生涯、著作 6 アタナシオス神学の特質Ⅰ：キリスト論と受肉論：『言の受肉』を読む。 7 アタナシオス神学の特質Ⅱ：聖霊論：『セラピオンへの手紙』を読む 8 アタナシオスにおける政治と神学 9 砂漠の師父と『アントニオス伝』：『アントニオス伝』を読む 10 デイデュモスの生涯と神学 11 エヴァグリオスの著作と神学 12 カップパドキア教父の生涯と時代 13 バシレイオスの時代と生涯 14 バシレイオスの神学：『聖霊論』を読む 15 まとめ 	
<p><準備学習等の指示> 古代教理史を復習しておくこと。</p>	
<p><テキスト> Francis, Young, From Nicaea to Chalcedon, Second Edition, Baker Academic, 2010 Chapters 1～4 買い求めておくこと。入手可能。4500円程度。</p>	
<p><参考書> その都度指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 討議での貢献と小論文。小論文は、テキストとともに、一冊の二次史料を指定するので、それに基づいて作成する。</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教父学特殊研究 b	関川 泰寛
後期・2単位	<登録条件> 特になし
<p><授業のテーマ> ニカイアからカルケドンまで（後半）の時代と教父神学を概観する。</p>	
<p><到達目標> ニカイアからカルケドンに至る古代教父の緒論とともに、キリスト論、救済論、聖霊論などの形成と展開を歴史的に跡付けて内容を修得する。テキストに沿って、該当箇所を発表してもらう。</p>	
<p><授業の概要> テキストに沿いながら、主題について講義をする。同時に、指定した一次史料を読解する。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ナジアンゾスのグレゴリオスの生涯と著作 2 ナジアンゾスのグレゴリオスの神学：『神学講話』を読む 3 ニュッサのグレゴリオスの生涯と著作 4 ニュッサのグレゴリオスの神学：『雅歌講話』を読む。 5 教会の説教者、教師、牧会者としてのカッパドキア教父 6 4世紀後半の教父の活動 7 シリアのエフライム 8 エルサレムのキュリオスの時代と神学：『洗礼志願者のための秘儀講話』を読む。 9 クリュソストモスの時代と神学 10 キリスト論論争の背景と経過 11 アポリナリオス 12 ネストリオス 13 アレキサンドリアのキュリオス 14 カルケドン定式 15 まとめ 	
<p><準備学習等の指示> 古代教理史を復習しておくこと。</p>	
<p><テキスト> Francis, Young, From Nicaea to Chalcedon, Second Edition, Baker Academic, 2010 Chapters 5～6 買い求めておくこと。入手可能。4500円程度。</p>	
<p><参考書> その都度指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 討議での貢献と小論文。小論文は、テキストとともに、一冊の二次史料を指定するので、それに基づいて作成する</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
キリスト教教育特殊研究 a	朴 憲郁
前期・2単位	<登録条件> 特になし
<p><授業のテーマ> 敬虔主義的伝統における教育の意義と展開</p>	
<p><到達目標> 宗教改革後の正統主義派に抗して起こった敬虔主義運動の中に、理論と実践における優れた教育的貢献を見ることができる。近代教育の創始者といわれるモラヴィア派のコメニウスはそこから排出された。それらの経緯と内的関連を考察する。</p>	
<p><授業の概要> 敬虔主義運動の中心に立つモラヴィア兄弟団とそこから多大な影響を受けたジョン・ウェスレーの神学思想の特徴を見、それが必然的に教育的展開をもち、日曜学校運動へと繋がることを跡づけ、確認していく。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 敬虔主義と教育―序説 2. ドイツ敬虔主義の創始者 Ph. J. シュペーナーの主張 3. A.H.フランケのキリスト教的人間形成理論 4. N.L.ツィンツェンドルフによる継承と発展―神学と教育― 5. 教育史におけるモラヴィア派の意義―ヘルンフト居住とその後― 6. J.ウェスレーとモラヴィア派―出会いとイギリス帰国後の活動― 7. フランケとウェスレーにおける聖化の強調、「キリスト者の完全」 8. モラヴィア派との訣別―ツィンツェンドルフとの対話― 9. J.ウェスレーにおける義認と聖化 10. J.ウェスレーのキリスト教教育論 11. J.ウェスレーとキングスウッド・スクール―当時の宗教教育状況― 12. J.ウェスレーと日曜学校運動 13. アメリカ・メソジスト監督教会の日曜学校運動―初期 14. アメリカ・メソジスト監督教会の日曜学校運動―組織的発展 15. 全体的考察―総括― 	
<p><準備学習等の指示> 毎回の授業の前半に、受講生が順次発表するが、非発表者も次回扱うテキスト箇所を事前に読んでおくこと。</p>	
<p><テキスト> 青山学院大学キリスト教文化研究センター編、『ジョン・ウェスレーと教育』、ヨルダン社、1999年。各自購入しておくこと。購入困難な場合は、担当講師が調達する。</p>	
<p><参考書> 授業時に随時、紹介するが、次の2冊は是非参考にして目を通しておくこと。購入困難な場合、プリントを配布。 1. M.シュミット、高松義数訳、『ジョン・ウェスレー伝―回心への内的発展』、新教出版社、1985年 2. H.ブッシュネル、森田美千代、『キリスト教養育』、2009年、教文館</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業数の2/3以上の出席を前提として、各自の発表と毎回の授業参加度、およびレポート（5000～7000字、その際参考文献2冊以上列挙、利用のこと）提出を評価する。</p>	

組織神学専攻	
博士論文指導演習組織神学 a	各指導教授
前期・0単位	<登録条件> 博士論文指導演習組織神学 b と通年で登録すること。
<p><授業のテーマ> 学生各自の関心に従い、博士論文のテーマを設定し、研究を深め、論文を執筆する。</p>	
<p><到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、博士論文の部分的作成に寄与する。</p>	
<p><授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、実際に博士論文の作成にあたる。</p>	
<p><履修条件> 2011 年度以降博士課程後期課程に入学した組織神学専攻者。</p>	
<p><授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。</p>	
<p><準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、アドバイスを受けるようにする。</p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p>	

組織神学専攻	
博士論文指導演習組織神学 b	各指導教授
後期・0単位	<登録条件> 博士論文指導演習組織神学 a と通年で登録すること。
<p><授業のテーマ> 設定したテーマのもとで、さらに研究を深め、論文を執筆する。</p>	
<p><到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、博士論文の部分的作成に寄与する。</p>	
<p><授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成を継続する。</p>	
<p><履修条件> 2011 年度以降博士課程後期課程に入学した組織神学専攻者。</p>	
<p><授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。</p>	
<p><準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、アドバイスを受けるようにする。</p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p>	